九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

佐世保市宇久町平方言の記述的研究

門屋, 飛央

https://doi.org/10.15017/4059956

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏　　名　：　門屋　飛央
論 文 名　：　佐世保市宇久町平方言の記述的研究
区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、五島列島最北端に位置する、佐世保市宇久町平方言に関する記述的研究である。これまでの日本語史研究は、中央語を歴史的に考察することで進められてきた。しかし、日本語とは、日本列島全体で話されている言語である。中央語だけではなく、各地の方言を記述し、それぞれの方言における日本語のあり方から、日本語史の全体像に迫る必要があると考える。本論文は、平方言を包括的に記述することによって、日本語史を重層的に考察することを目的とする。また、本論文は、方言が消滅しつつある地域の言語を、記述し保存することにもつながっている。

本論文は、２部構成である。「第１部　宇久町平方言の文法記述」は、平方言を包括的に記述し、文法体系を明らかにしようとするものである。第１部では、「２．音韻論」「３．形態論」「４．格」「５．単文」「６．複文」の５つの章を立て、詳細に記述した。「第２部　平方言にみられる文法現象」では、共通語と異なる文法体系をもつ平方言を、いくつかのトピックから深く考察するものである。第２部では、「７．宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法」「８．宇久町平方言の可能形式」の２つの章を立て、説明を行った。最後に、結語として、まとめと今後の課題を示した。また、巻末に、付録として、「小値賀町藪路木島方言の/(-a)-Ns-/を用いた行為指示」をつけた。

第１部の「２．音韻論」では、平方言の音素目録や音節構造、音韻規則について述べた。平方言の音節構造はCGV_1V_1Mが基本である。Mはモーラ音素を指し、共通語にない音素である/H/を設定している。音韻規則には、連濁、半濁音化、狭母音の脱落、連母音の融合のほか、主題の//=wa//の同化や与格助詞/-ni/の/n/の削除や代償延長についても記述した。

「３．形態論」では、まず、言語の単位を形態統語的自立性と音韻的自立性によって分類し、品詞の定義を行った。そして、動詞や形容詞の活用、それぞれの品詞の統語的特徴について述べた。動詞や形容詞に接続する屈折接尾辞や派生接尾辞を挙げ、その用法を記述した。その他の品詞についても、その用例を挙げながら記述した。いくつかの品詞にまたがって用いられる指示詞と疑問詞も、同様に記述した。

「４．格」では、格助詞の一覧を示した。そして、実際の用例に基づきながら記述を行った。

「５．単文」では、ヴォイス、アスペクト、モダリティについて述べた。受動文では、「カラ」が動作主を示す形式に広く用いられていることを記述した。アスペクトは、/-wor-/が「進行」、/-tjor-/が「結果継続」で用いられていることを記述した。認識的モダリティとしては、推量表現、様態表現、伝聞表現について記述を行い、義務的モダリティとしては、意志表現、希望表現、禁止表現、当為表現について記述を行った。対人的モダリティとしては、主に終助詞を記述し、「ネヨ」という共通語にはみられない承接の形式があることを述べた。これは、当該方言で命令的指示に用いる「ネ」を、「ヨ」によってやわらげているものである。

「６．複文」では、従属節を「補足節」「名詞修飾節」「副詞節」「等位節」に分類し、実際の用例に基づきながら記述を行った。

第２部の「７．宇久町平方言の「ゴト（如）」の用法」では、連体形に接続する「様態」と仮想形に接続する「希望」とで、形態と意味の対応があることを示した。さらに、平方言の「希望」の「ゴト」は明確な「希望」であって、曖昧に言うことのできない事態にも用いられることを述べた。他の九州方言における様相と比較しながら、考察を行った。

「８．宇久町平方言の可能形式」では、「ヤユル」が動作主体内部条件に属する形式であり、「ラルル」が動作主体外部条件に属する形式であることを述べた。また、「キル」についても、「能力可能」の形式であることを述べた。当該方言の記述を通して、可能文における使用の「条件」や意味の分類についても、あらためて考察を行った。

最後に、以上のことをまとめた結語を記した。付録の「小値賀町藪路木島方言の/(-a)-Ns-/を用いた行為指示」では、「行かンセ」（行きなさい）のような行為指示に用いられる形式を記述した。/(-a)-Ns-/が親しい目上に対する形式であるほか、直接働きかけるときにしか用いられないことを述べた。また、聞き手の負担の大きいときなど、配慮がより必要な場合には用いられないことも併せて述べた。

今後の課題は、包括的記述を行う範囲を、他の五島列島方言に広げていくことが挙げられる。これは、同じ五島列島方言であっても、文法体系が異なっていることがあるためである。包括的記述を積み重ねることで、記述の網目を細かく密にしていくことができると考える。また、本論文では、歴史的な考察にまでいたることができていない。本論文をもとに、通方言的な視野をもって、重層的な日本語史を描くことがこれからの課題となる。